

「八王子ってどんな町？」ナビゲーター 吉田美江

ワークショップにあたって

八王子は小高い山々に囲まれた、小さな盆地である。深い歴史があり、重要な拠点でもあった地域である。

小高い山々から湧き出した清水は、中心地の市街地に流れ込み今も町を潤している。川を考える上で山を見ないわけにはいかない。山の頂上に何があるのか。人々は何を見たのか。

八王子に残された伝説や昔話は、八王子の風土、歴史、民情によって発生し、現在に至っている。特に川の流域に残された、伝説や昔話は八王子の民俗を知るうえで重要であると考えられる。

史実としてくわしく残せなかった大久保長安に関する伝承話は、八王子において里人の心情を表していると考えられないだろうか。長安に何が起こったのかは里人には知らされることもなく、一方的に悪人説が定着することを里人は受け入れることができなかったのだろう。なぜなら、安定した平和な村の生活を創造してくれたのが長安であることを、誰よりも知っていたのだから。民俗学と歴史学を融合させることで、より豊かな地域の有様を考えることができるのではないだろうか。ワークショップを通して、参加者と共に考えていきたい。

水の豊かな伝説の町 八王子

- 1 八王子の地名縁起
- 2 八王子の河川と河川に残る歴史伝説
 - 城山・浅川・水無し河原・弘法伝説
 - 関根神社伝説
 - ・赤まんま伝説
 - 華川・・・華川の泣き地蔵
 - 川口川・・・代官淵の長安伝説
 - 雲十郎松
 - 牛頭天王の川流れ
 - 今熊山の呼ばわり伝説
 - 雹留山伝説

 - 湯殿川・・・地名縁起
 - 湯殿川の川天狗
 - 黒髪淵（湯殿川と浅川の合流点）

1 八王子の地名縁起

由比という地名から八王子という地名がおこるまでの歴史的流れ

- 弘仁年間（810～824）由比別当宗弘。由比牧を奉行した別当。
- 延長 5 年（927） 延喜式の撰上。ここに由比牧の名が出てくる。〔諸書〕。
- 天慶元年（938） 由比牧〔本朝世紀〕
- 正和 2 年（1313）由比本郷の分割〔天野家文書〕
- 貞治年（1363）由比野村〔東福寺文書〕
- 至徳 2 年（1385）由比郷〔東福寺文書〕
- 応永年間（1394～1428）由井郷〔川口円福寺文書〕
- 戦国期（1478～1573）由井領
- 文禄 4 年（1595）由比領の総鎮守・八王子明神勧請・日吉町の日吉神社のこと。

牧の条件・・「山林、原野、川、沢に恵まれ、流水、礫川にて砂石を踏み習う。」
牧場鍛錬の地として由比の里はふさわしい場所であったといえよう。

八王子という地名

深沢山（八王子城山）には、里人によって山の神が祀られ、山から湧き出た沢は北浅川となって豊かな川として下流に流れていった。命の水の湧水地、城山である。

山の神として祀られていたところに、由比牧の奉行としてきた由比別当宗弘が、牧場の鎮守神として、日吉神社=日枝神社=八王子権現社を勧請。

当時、平安京遷都（794 年）から日も浅く、都を守る寺として比叡山延暦寺が営まれたばかりで、東の山麓には山の鎮守の神として日吉大社が鎮まっていた。

同じ思いで、宗弘が由比牧の地、水源としての山の頂きに日吉大社の神=八王子権現を祀ろうとしたことは、当時としてごく自然のことだったろう。

由比牧—由比本郷—由井郷—由井領と地名が変遷した中であって、八王子権現信仰だけは絶えることなく、人々の心を結びつけていた。

延喜 16 年（916）僧妙行（のちに華嚴菩薩）が、修行の末、牛頭天王八王子権現の神勅を受けて、深沢山の山上に八王子権現社を勧請したというのが、それ以前から山岳信仰の種が播かれていたのだらう。

北条氏照は幼いころ、由井源三を名乗っていた。由井の地に城を築くとき、山の神、八王子権現を城の鎮護の神として「八王子城」と命名したのは当然のことだったろう。何より、この城山が当時の人々にとって大切な、最も重要な拠点であったことは、一つの山が、深沢山、八王子城山、牛頭山、神護寺山、慈根山など、いろいろな名前で現されていることでも知ることができると思う。

文禄 4 年（1595）には日吉町にあって由比領の総鎮守とされたのである。日吉八王子山王八王子明神社と表記されており、明神社の末社として稲荷祠のあることを記している。この稲荷社が「由比領の総鎮守なり。由井領 75 カ村の名を記したる古帳あり。」明神勧請の以前から、この地には総鎮守の稲荷社があったことになる。それこそがこの地の本来の里人の鎮守神を祀ったものであろう。古来からの土地神と支配者の勧請神との交代をしめ

すことなのではないだろうか。

2 八王子の河川と河川に残る歴史伝説

八王子の水源

町を囲むように山々が連なっているが、高峰は醍醐丸(867m)で町の最も西に位置する。陣馬山(857m)、そして高尾山、八王子城のあった城山へと続いていく。醍醐丸の西1.7kmの所に最高峰の連行峰(1028m)がある。

この山が、420年前、現在の八王子の町づくりに重要な意味を持ち、また各々の山々が分水嶺として町に流れ込む川の水源となって、人々の生活を支え、民俗信仰の基となっている。

* 城山川流域

城山とは戦国の末期、北条氏照の居城のあった所で、武州の重要拠点として栄えた場所である。城山は標高445.5m、古称として深沢山、牛頭山、慈根寺山、八王子山など幾つもの名前を持った山であるが、高尾山の峰々の一つであるため、低い山でありながら山間から流れ出した水は豊かな水量を持っている。幾つかの沢と合流しながら、陣馬山を源流とする北浅川に注いでいる川である。川の長さは7.7kmで、源流部には戦国末期、北条氏照の居城であった八王子城跡が残っている。

* 南浅川

この川は、高尾山を水源として幾筋もの沢を合わせながら、北浅川に合流している。川の長さが短い分だけ流れが速く、420年ほど前までは、合流地点が氾濫を起こし、浅川流域の河川敷は、荒れ狂う水に飲み込まれ、人の住めるような所ではなかった。

合流点の少し手前の所は水無し河原(水無瀬橋という橋の名が残っている)といって、伏流水となって流れが地表から姿を消してしまう。ただひとたび大雨でも降ろうものなら、水量は一気に増え、洪水を引き起こす。

南浅川の治水

南浅川と北浅川の合流点を治水したのは、今から420年ほど前のこと。八王子城が落城し、城下にあった集落は3度移転した。現在の八王子盆地のほぼ中央に位置し、旧甲州街道と古川越街道の交差する交通の要地、横山の地が最終的に選ばれた。そこは、大雨が降れば洪水と化す、浅川の河川敷原野だった。

新しい町づくりに取り組んだのは、徳川家康の配下で、関東を治めることになった大久保長安代官頭であった。南浅川の流れを北浅川に直角にぶつかるようにして、流れの速さを変えることで、大雨が降っても洪水を起こさないようにした。そして、堤のなかった浅川に堤をつくり、町囲いとした。

宿場町として栄え、武州一帯の行政を司る小門陣屋が出来、八王子は長い間栄えることになる。しかし大久保長安に、江戸幕府転覆を計っていた、金銀財宝を隠匿していた等の嫌疑がかけられ、死んでから裁かれ罪人となったため、八王子では一切大久保長安の名前

を出すことができなくなった。その後、長安が治水工事や灌漑用水池をつくった周辺に、奇妙な話が残されていくことになるのだ。

水無し河原の伝説は、弘法伝説である

旅のみすぼらしい坊さまが、川を通りかかった。長旅で喉の渇きを覚え、川のほとりにある一軒の茅屋に立ち寄り水を下されと頼んだ。しかし、この家の老婆は、坊さまを一瞥すると、くれる水はないと冷たく断った。すると、坊さまは悲しそうな顔をされて、川のほとりでなにごとかつぶやいて立ち去ったそうじゃ。これより、いまままで滔々と流れていた浅川の水はこの時限り干枯れ、ついに水無河川になったんだ。

この伏流水は東の方角に流れ続け、町が終わる所くらいで、また地表に現れてくるのである。江戸期には、甲州街道八王子宿として栄えた町だが、町の水は、伏流水となった地下水を汲み上げ人口水道とした。甲州街道の真ん中に井戸を何基も掘って飲料水としていた。

関根神社伝説

赤まんま伝説

天正 18 年（1590 年）6 月 23 日、八王子城は豊臣秀吉の連合軍に攻められて、1 日で落城してしまった。そのとき、城主の北条氏照は本城の小田原城を守るため、精鋭部隊を引き連れて小田原にいた。八王子城を守っていたのは、老兵、若い兵、僧侶、神官、女、子ども、年寄りなど、第一線の兵ではなかった。攻め手は、前田利家、上杉景勝など戦いに慣れた侍集団。堅固な山城も 1 日で落城してしまった。守備隊の構成をみれば、1 日守り抜いたのは立派なことであったといえよう。悲惨な戦いだったと聞いている。最後を覚悟した人たちは、自害し、女、子どもは城山川の御主殿の滝に身を投げて果てたという。

城山川の水は、3 日 3 晩真っ赤に染まりながら流れたという。それ以来、里の人々は 6 月 23 日には赤飯を炊いて必ず供養すると伝えられている。亡くなった大勢の人たちを忘れないよう、赤まんまと呼ぶ供養米を焚いているのである。赤飯は本来、慶び、晴れの日には食するものであるが、城山川流域では供養米として扱っているのである。

* 川口川

高さ 505m の今熊山（別称・呼ばわり山）を水源として、東南に流れ、浅川に合流する長さ 15 km の川である。北側には加住丘陵、南側には川口丘陵が続いているためか、突然天気が変わる地域でもある。

今熊山には今熊神社が祀られていて、正平初年（1346 年）熊野本宮大社を豊が原に勧請したと伝えられている。

川口川は、代官淵を過ぎ、蛇行しながら浅川に合流する。

代官淵

1、深い繁み、不気味な淵に御曹司の姿、川面に御女中衆が建っているのが見えたかと思う

と、すーと消えてしまう。

- 2、たおやかな女子が水面に現れたかと思うと、悲しげに美しく舞う姿を見ることがある。
- 3、代官淵から鳴いているような鼓の音がする。とんとんとん
- 4、浅川の土手、陰暦の1月25日、北風に乗って首だけ飛んでくる。前を歩く人の肩に乗り悲しそうに振り返る。

代官淵に残る長安伝説

灌漑用水を目的につくられた淵があった。

大久保長安の町づくりの中で、商業地域と同時に、水田開発は重要な任務であった。浅川の治水対策とともに、浅川に注ぐ川口川の治水対策も行ない、この流域は稲作地帯として整備された。弥生時代から稲作地帯であった所を、灌漑用水対策をすることでより豊かな肥沃な水田地帯にしたのである。里人にとって長安は実行力のある代官であり、最も頼りになる領主であった。

ところが、亡くなるとすぐに極悪人のレッテルを張られ、名前を口にすることもできなくなってしまった。里人にとっては降って湧いたような出来事に、ただただ従うだけだっただろう。これまでの数々の政策に対し、感謝こそすれ忘れ去ることなどできなかった里人は、わからないように伝説として不思議な話を、長安の名前を出さずに残した。怖い話、奇妙な話であればあるほど残り、語り続けることを知っていたのだろう。

雲十郎松

長安の死後、幼少の雲十郎が大和田刑場で、死罪が施行されることになったが、逃がしたそうじゃ。雲十郎は、逃げ切れなくて代官淵に身を投げたんだと。骸は流れて極楽寺付近に上がり、ひそかに埋葬されて、その上に松を植えたんだと。その松を里人は「雲十郎松」と呼んだそうじゃ。決して登ったりせんようにな。

牛頭天王の川流れ

八王子城が落城した時、牛頭天王の御神体（鏡）が川口川に飛来し、流され、浅川の板が淵で拾い上げられた。横山の総鎮守であった八幡宮に合祀した。うっそうとした社社は、久しく天王の森と呼ばれていたが、1945年（昭和20）八王子空襲で焼失。相殿造りで、八王子神を奉斎する。

今熊山の呼ばわり伝説

行方知れずの人の名を3度この山で呼べば、わかるといわれ、武蔵図絵では、「神恵を願うもの常に絶えずして、次第に繁昌セリ」と記述されている。

「おでしゃれ、おでしゃれ、おでしゃれよ」と唱えながら、山を巡り安否を祈るのだそう。第2次世界大戦中は、残された家族の参詣が多かったという。

雹留山伝説

突然の天候異変で、赤子の頭ほどの雹が降り、息子を案じて山に迎えに行った母親が雹に当たって死んでしまう。残された息子は、嘆き悲しむとその悲痛な叫びが一人の

僧侶に届いた。旅の坊さまは、哀れに思い、この場所には2度と雹は降らせぬと祈願して立ち去った。それ以来この川口川流域は天候異変からまもられたという。旅の坊さまは、弘法さまだったと。

*湯殿川

堂平から流れ出た細い川は、幾つかの沢を合流しながら、ゆったりと蛇行しながら東に向かって流れ続ける。

鎌倉時代の話を残しながら、肥沃な水分を周囲の田畑に供給しながら、ときには洪水を起こしながら、流れ続け、浅川と合流する。

湯殿川の地名縁起

御霊伝説

湯殿川の川天狗

黒髪淵伝説

最後に

近世に入っては、織物の町として水とは切っても切れない人々の営みが続いた八王子。長い歴史の中で、八王子には外から統治者、指導者がやって来て支配していくのだが、支配者が変わるたびに、人々は不安な生活を強いられた。馴れるまでに相当な時間がかかったことだろう。

話してはならないことや、記録に残したいこともあったことだろう。人々は、残したいことを伝承という形で伝え続けきたとしか思えないのである。証拠を残さずに伝えることは、伝承という形態でしかなかったのではないだろうか。

繁栄した地域であるのに、人々の継続した歴史観が薄いのは、指導者、支配者が継続されてこなかったからではないだろうかとも思う。

落城伝説、長安伝説などを聞くたびに、八王子の里人の弱者に対する優しさと、権力者に対する無言の抵抗のようなものを感じる。報われることが無いよう、魂の昇華を祈って里人は伝説や昔話として伝承し続けてきたのだろう。

「心中するなら銚子の海で、駆け落ちするなら八王子・・・」と江戸期に謳われた八王子。山からの恵みの水は、命をつないでくれる八王子の宝物でもあるのだ。

参照

菊地正著「とんとんむかし」・「菊地正資料集」、新編武蔵風土記稿、桑都日記
武蔵名勝図絵、北島藤次郎著「史実大久保長安」、設楽政治「高尾山麓夜話」、
樋口豊治「江戸時代の八王子宿」、村上直著「論集・代官頭大久保長安の研究」
阿部正路「日本の妖怪たち」、大脇良夫・植村善博著「治水神禹王をたずねる旅」